

様 式 F-7-1

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成23年度）

1. 機関番号 

3	2	6	0	4
---	---	---	---	---

      2. 研究機関名 大妻女子大学
3. 研究種目名 基盤研究(C)      4. 補助事業期間 平成23年度～平成25年度
5. 課題番号 

2	3	5	3	0	9	1	9
---	---	---	---	---	---	---	---
6. 研究課題 言語機能分析を用いた心理療法の効果研究

## 7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
6 0 3 1 6 9 1 6	フクシマ テツオ 福島 哲夫	人間関係学部	教授

## 8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名
8 0 3 1 1 5 0 4	カトウ スミ 加藤 澄	青森中央学院大学・経営法学部	教授
1 0 3 2 6 5 2 2	イワカベ シゲル 岩壁 茂	お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科	准教授

## 9. 研究実績の概要

実際の心理療法の5事例10セッションを録音・録画したものを元にトランスクリプトを作成し、言語分析をおこなった。その中でもとくに感情を表す言語（評価言語）に関して、クライアントの発言とセラピストの発言の両方を分析した。その結果、本研究における言語分析・質的分析・音声分析ともに、感情や評価言語を中心にすることで、セラピーのプロセスや効果の測定として非常に有効な方法となりうることが示唆された。今後はさらにC1の問題・症状別の目標設定とその測定項目を対応させる工夫が必要であると言える。その意味では、ケースフォーミュレーションと組み合わせて使用すれば、単なる効果測定だけでなく、セラピーをより効果的に進めていくための指針や指標ともなると考えられる。

今後さらにデータを増やしていくことにより、分析結果の安定性を高めたり成功例と失敗例の比較による検討をはかる必要がある。現時点での手応えとして、成功したケースはセラピーの中でとくにセラピー中期においてC1の感情面に十分に触れており、さらにその感情が内容的にも強度としても変化していくという特徴があると言える。そして、そのためにThが十分な共感を示しながらも、そのC1の感情を肯定したり受け止める介入により、C1の感情調整をたすけ、その後さらにC1の「名詞化表現」や「メタ認知」を促進するような介入により、感情の肯定的方向への変化や安定化をはかっているということがうかがわれる。その意味でセラピーにおけるTh-C1関係は、やまだ(1987)の「うたう関係」や「並ぶ関係」の中でおこなわれる情動的コミュニケーションであるが、それらがさらに精緻に戦略化されたものであると言える。今後、さらにセラピー中の戦略化された情動的コミュニケーションについて、その戦略そのものと、そこから引き起こされるプロセスを明らかにしていきたい。